

山の学習支援事業プログラムの実施例

対象プログラム	No.22 川の環境と生き物の世界を見る
---------	----------------------

学校名	四万十町立米奥小学校
学年・生徒数	16名(2年 5名、3年 3名、4年 2名、5年 3名、6年 3名)
実施場所	米奥小学校(校内教室)、四万十川(小学校近く)
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・四万十川の豊かな森林の恵みに感謝し、森林や山、川を守ることの重要性に対する理解と関心を深める。 ・児童一人一人が保護者や地域の方と協働して森林や川を守る活動に参加し、また自ら行動することによって山や川を守り育てていく気持ちを醸成させる。 ・体験活動を通して故郷に誇りをもって行動できるような気持ちを育てる。
実施教科	総合的な学習の時間、生活科
関連教科	理科、社会科
準備物	児童…弁当、水筒、防止、ウォータースシューズ、タオル、着替えなど 学校…講話用参考資料(印刷・配布)、ライフジャケット、釣り具類一式 講師…PC、水生生物観察用道具(網2種類、ケース、救命浮き輪など)

実施項目	講話(山と川と海の関係、アユの一生)、水生生物観察、釣り体験
対象プログラム	No.22 川の環境と生き物の世界を見る
所要時間	<ul style="list-style-type: none"> ・講話 約45分 ・水生生物観察、釣り体験 約2時間
実施内容	<p>・<u>講話</u> (テーマ:山と川と海の関係、アユの一生)</p> <p>校長が挨拶し、学習の目的・スケジュール・講師の紹介等をした。</p> <p>講話の資料(A4サイズ・10ページ・カラー印刷)が児童等に配布された。講師(公益財団法人四万十川財団)は参考資料や画像などをモニターに写し(配布資料と同様の内容)説明した。「アユの一生」の話を通して山と川と海(関わり)について学べる内容となっていた。参考写真は、実際に四万十川に生息している魚の画像を使い、魚の名前当てクイズ等をして関心度を高めていた。</p> <p>・<u>体験学習</u></p> <p>児童は着替えてライフジャケットを着用し、玄関前に集合した。</p> <p>講師(地元漁業組合・有志の方々、四万十川財団)が挨拶した後、学校近くの四万十川に移動し(徒歩3分程度)、2～4年生と5～6年生の2グループに分かれて体験学習をした。</p> <p>①<u>2～4年生(水生生物観察、ハヤ釣り体験)</u></p> <p>まず、講師が水生生物の見つけ方や注意点などを説明した。児童に網が配られ、川の浅瀬で石を裏返すなどして水生生物を見つけて捕獲し、容器に保管した。最後に皆で集まって捕獲した水生生物を観察し、講師が名前や特徴などを説明した。(約50分間)</p> <p>10分程度休憩をとり、水分補給などをした。</p>

その後、漁業組合等が講師となり、ハヤ釣り体験を行った。エサは、水生生物観察で捕獲した川虫（ヒゲナガカワトビゲラ）を使用した。児童は、竿の持ち方や投げ方、エサ付け等を講師に習いながら釣り体験をした。（約1時間）

②5～6年生 釣り体験（アユの友釣り）

講師が、道具の使い方などについて指導した。事前の講話で「アユの一生」を聞いて予習ができていたので、友釣り仕組みは理解できていた。

竿が隣人の邪魔にならないよう児童6名が10m以上の間隔をあけて配置につき、児童一人に講師一人が付き添いマンツーマンで行った。時々、釣れるポイントを探して場所を移動しながら、約2時間、友釣り体験をした。

・昼食、意見交換

校舎に戻り着替えた後、昼食を食べながら、児童、教員、講師、関係者らが意見交換などして交流した。

地元漁協組合や保護者らがアユの塩焼きをふるまった。（弁当は持参）

実施風景



補足 その他、プログラムの 特徴

- ・捕獲した水生生物…ヒゲナガカワトビゲラ（釣り体験の餌にする、地元ではゴムシと言う）、フタツメカワゲラ、ヒラタカゲロウ、ヒラタドROMシ（親・子）、サワガニ、コオニヤンマのヤゴ、カワヨシノボリ など。
- ・学校から河川へ続く歩道は、地域の方や保護者が事前に草刈りなどして整備していた。
- ・事前に（5月頃）山と川の学習のオリエンテーションを行っている。
- ・この他、学校林の名付け、シイタケ駒打ち、木工作品など、年間を通じて環境学習を実施している。
- ・保護者や地元の方々も協力し、学校・地域が一体となって取り組んでいる。